

現代文学における「姨捨」の系譜(一)

— 太宰 治「姥捨」 —

工 藤 茂

はじめに

「日本では、美しい風景ほど残酷な伝説を含む」という書き出しで始まる「姨捨」(井上靖)論を書いたのは、阿部正路氏であった¹⁾。この一文はまた、「姨捨」ということばの語感をも、見事に象徴している。「姨捨」ということばに接する時、私はそこに、美しくも残酷な背景を、ありありと思い浮かべる。おそらくそれは、「姨捨」ということばに収斂される日本文学の古典の世界が、あるいは口承文芸の世界が、時空を超えて蘇ってくるからであろう。その際主要な音調をなすものは、「わが心なぐさめかねつ……」という「古今和歌集」の読人しらずの歌であり、謡曲「姨捨」である。

人間は生まれてくる時そうであったように、死んでいく時

もまた一人である。このような厳然たる事実をその宿命として持っているとはいえ、やはり棄老という主題は残酷だ。この残酷さが、逆に「姨捨」の美しさを際立たせているのであろうか。しかもこの主題は、決して色褪せることなく、現代にまで流れ入っている。

この「姨捨」の各時代相を「万葉集」から「檜山節考」まで、その主題の変遷に照明を当てて丹念に辿ったのが、米田貞一氏の『「姨捨」の系譜』(本誌第十九号)であった。ただし氏は、現代文学の中からは、「檜山節考」しか取り上げておられなかった。そこで私は、その流れの中の、特に現代文学における「姨捨」の系譜に焦点を絞って、私見を述べていくつもりである。既にその概論は、昭和五十四年七月十日発行の『日本文学論究』(第三十九冊²⁾)に発表しているが、今回は各

論の第一回として、太宰治の「姥捨」を取り上げてみることにする。

一

太宰治の小説「姥捨」は、最初、昭和十三年十月号の『新潮』に掲載され、後、昭和十四年七月砂子屋書房刊の短篇集『女生徒』に収められた。そして戦後、昭和二十二年六月、ポリゴン書房刊の『姥捨』に再録された。この短篇集は「葉」[I can speak]「姥捨」「東京八景」「みみづく通信」「佐渡」「たづねびと」「千代女」によって構成されているが、その「あとがき」で太宰治は次のように書いている。

この短篇集を通読なさつたら、私の過去の生活が、どんなものであつたか、だいたい御推察できるやうな、そのやうな意図を以て編んでみた。ひどい生活であつたがしかし、いまの生活だつてひどいのである。さうして、これから、さらにひどい事になりさうな予感さへあるのである。

卷末の「千代女」は、私の生活を書いたものではないが、いまの「文化流行」の奇現象に触れてゐるやうにも思はれるので、附け加へて置いた。

この「あとがき」は、短篇集『姥捨』の性格を端的に示すものであるけれども、同時にそこには、戦後の世相に対する彼自身の批判が、暗に籠められていた。そしてさらに言えば、

その混迷を極めた彼自身の晩年（戦後）の生活すらも、ここから読み取ることが可能なのである。このように重層的に読む時、この短篇集の題名に象徴される現代の「姥捨」の諸相が、里見弴の「姥捨」（昭和二十一年）、井上靖の「姨捨」（昭和三十年）、深沢七郎の「楢山節考」（昭和三十一年）、水上勉の「じばばの記」（昭和三十九年）などの諸作を伴って、航跡のように浮かび上がってくるのを覚えずにはいられない。しかしここでは、次の太宰治の書簡とともに、小説「姥捨」の性格を示す一つの資料として、掲げてみたのである。

昭和十三年八月十一日、東京市杉並区天沼一丁目二百三十三番地鎌瀧方より山梨県南都留郡河口村御坂峠上天下茶屋井伏鱒二宛の書簡の中に、次のような部分がある。

私は、毎日、少しづつ小説書きすすめて居ります。もう二、三日でいま書いてゐる小説書きあがる苦で、これを新潮に送り、それからすぐ、文藝春秋に送るのを書かうと存じて居ります。リアルな私小説は、もうとうぶん書きたくなくなりました。フィクションの、あかるい題材をのみ選ぶつもりでございます。

『全集』の註によると、「いま書いてゐる小説」というのは、「姥捨」のことであるという。「新潮に送る」ということ、執筆の時期などから考えて、この註はほぼ間違いないものと考えられる。とすれば、この小説は「リアルな私小説」であつたということにならう。なぜならば、書簡の引用部分の後

半の箇所から判断して、「もうとうぶん書きたくない」「リアルな私小説」を、「いま書いてみる」と思われるのだから。

ところで太宰は、どうして「リアルな私小説は、もうとうぶん書きたくない」「フイクシヨンの、あかるい題材を」選びたくなったのであろうか。おそらくそれは、「姥捨」の内容の暗さに関わり合うものであつたらう。昭和十六年一月号の『文學界』に発表された「東京八景」に、その間の事情を探してみると、次のような箇所に着着する。

けれども、まだまだ、それ（註——板橋区の脳病院退院後の、Hと二人の、何もない荒涼とした生活）は、どん底ではなかつた。そのとしの早春に、私は或る洋画家から思ひも設けなかつた意外の相談を受けたのである。ごく親しい友人であつた。私は話を聞いて、窒息しさうになつた。Hが既に哀しい間違ひを、してゐたのである。

（略）そのうちに洋画家は、だんだん逃げ腰になつた。私は、苦しい中でも、Hを不憫に思つた。Hは、もう、死ぬるつもりであるらしかつた。どうにも、やり切れなくなつた時に、私も死ぬ事を考へる。二人で一緒に死なう。神さまだつて、ゆるしてくれる。私たちは、仲の良い兄妹のやうに、旅に出た。水上温泉。その夜、二人は山で自殺を行った。Hを死なせては、ならぬと思つた。私は、その事に努力した。Hは、生きた。私も見事に失

敗した。薬品を用ゐたのである。（略）

やがて、「姥捨」といふ作品が出来た。Hと水上温泉へ死に行つた時の事を、正直に書いた。

太宰治と小山初代の心中はその確証が無く、太宰の虚構かと思ふむきもあるようではあるが、少なくとも、以上に掲げた三点の資料（つまり『姥捨』の「あとがき」、井伏鱒二宛書簡、「東京八景」から「姥捨」の性格を考へてみると、「Hと水上温泉へ死に行つた時の事を、正直に書いた」「リアルな私小説」であつて、太宰の「過去の生活が、どんなものであつたか、だいたい」推察できるような作品と規定することができよう。従つて「姥捨」はその解釈のうえで必要な場合には、そこに登場する嘉七を太宰治（津島修治）に、またかず枝を小山初代に、それぞれ還元して考へていつても差支えない小説と見なすことができる。

それでは「姥捨」とは、どのような内容を持つた小説であらうか。その概要をまとめてみると、次のようになる。

妻のかず枝は、自分のあやまちの始末をきちんとつけるといふ。嘉七はそんな妻を執り成しているうちに、ふと自分も死のうと考へる。それは早春の一日であつた。二人は身の回りを整理し、有り金全部持つて街に出る。途中、自殺用の催眠剤を買ひ、活動を見、すし屋に寄り、漫才館にはいった。その間嘉七はいろいろな思いにとらわれ、かず枝を死なせてはいけなさと考へる。

やがて二人は、上野駅から新濁行の汽車に乗り、途中水上駅で降りて、山上の谷川温泉へ行く。その老夫婦は二人の知り合いであった。一泊して、翌朝早く二人は山を下りながら、死場所を見つける。嘉七は、かず枝には死に至らないほどの催眠剤を渡して、心中をはかる。嘉七だけは本当に死ぬつもりであった。しかし、最初に覚醒したのは、彼であった。かず枝は未だ気がついていない。嘉七は彼女の処へ這って行った。かず枝は幸い死んではいなかった。気が緩んで、嘉七は再び気を失った。二度目に目覚めた時、かず枝は大きな躰をかいていた。と、突然、彼女が叫び出した。そして叫びながら、ころころ下にころがっていった。月光に照し出された彼女の髪は、山姥の髪のように、荒く、大きく乱れていた。嘉七はかず枝の体を抱え、引きずり上げようとする。しかし、彼女の体は重い。その時嘉七は、この女は、おれには重すぎる、いい人だが、おれの手にあまる、と感じ、わかれようと決心する。

嘉七はかず枝を谷川温泉に残して、一人で帰京した。そして、あとは彼女の叔父にその事情を打ち明けて、一切を頼んだ。かず枝を家に引きとった後、その叔父は、谷川温泉でのかず枝の様子を、宿の娘みたいにのんびり寝ていた、おかしな奴だ、と話して笑っていた。

「姥捨」は、太宰治の代表的な小説の一つであるとは言いが切れない。なぜならば、その一篇が必ずしも完結した一つの世界を創り上げているとは言えないから。もっとも、短篇小説は、ある世界の、あるいはある人生の、鋭い感覚によって抉り取られた一断面を提示するという性格を持っているものであるから、それでもいいということになるかもしれない。

しかし、この小説の場合、やはり二人が心中しなければならぬ必然性を、読者に明示しなければ、読者の納得はえられない。そのためには、その核をなすかず枝の過失が、何に起因するものか、また、どのような条件によって起こったものかを、後年の「東京八景」または「ヴィヨンの妻」のように、書き込む必要があった。それなのに「姥捨」では、次のようにしか書かれていない。

あやまった人を愛撫した妻と、妻をそのやうな行為にまで追ひやるほど、それほど日常の生活を荒廃させてしまった夫と、お互ひ身の結末を死ぬことに依つてつけようと思った。

生きて、ふたたび、この女と暮して行く気はないのか。借錢、それも、義理のわるい借錢、これをどうする。汚名、半気ちがひとしての汚名、これをどうする。病苦、人がそれを信じて呉れない皮肉な病苦、これをどうする。

さうして、肉親。「ねえ、おまへは、やっぱり私の肉親に

敗れたのだね。どうも、さうらしい。」

これだけでは、借錢、病苦、肉親に関わる嘉七の生活の荒廃が妻を過失に追いやったという、抽象的なことがらしか分らない。しかもその相手の男については、「金があれば、なにも、この女を死なせなくてもいいのだ。相手の、あの男が、もうすこしはつきりした男だったら、これはまた別の形も執れるのだ。」と述べられているだけなのだ。そしてあとは、

こんどのは？ ああ、いけない、いけない。おれは、笑ってすませぬのだ。だめなのだ。あのことだけは、おれは平気で居られぬ。たまらないのだ。

ゆるせ。これは、おれの最後のエゴイズムだ。倫理は、おれは、こらへることが出来る。感覚が、たまらぬのだ。とてものがまんができぬのだ。

と、嘉七の想いのみが連綿と述べられていくだけである。つまりこの小説には、客観的に描かれるべきも一つの世界が、見事に欠落しているのだ。そういった意味において、この小説もまた他の私小説と同じ欠陥を、免れることができなかった。山岸外史氏も、既にこの点を指摘して、次のように述べている。

「姥捨」は、まったくアリズムの作品だと思うが、女のそうした不倫のところを、すこしばかり、早口にきりあげたようなところがあるようにも思われる。太宰が触れたがらなかったために表現に不足したのではなから

うかと、当時のよくが考えたことがある。作家として欠点のある仕事だと思つたりしたものだが、それでも、それとわかつて読むと、その辺の消息を短い行で巧く表現してはいる。

短篇作家としての当時の太宰は、たしかに、こんなところをもつと掘りさげて、長篇的に思索すべきではなかつたかと思うようなところもある。しかし太宰はむしろ、倫理の作家だったのかも知れない。(人間太宰治)

このような欠点を持つているために、「姥捨」は太宰文学の代表作たり得なかつたが、しかし、その文学の中で重要な地位を占めているのは事実である。その理由を述べる前に、ここでは「姥捨」に欠落しているもう一つの世界、つまり、太宰治と小山初代に還元される小説の背景を、探っておかなければなるまい。

昭和十一年十月十三日、太宰治の後半生に濃い影を落とす一つの出来事が起こつた。それを彼は次のように書いている。このたびの入院は私の生涯を決定した。(碧眼托鉢)

十月十三日より、板橋区のとある病院にゐる。来て、三日間、齒ぎしりして泣いてばかりゐた。(略)ここは、気ちがひ病院なのだ。(HUMAN LOST)

「板橋のとある病院」とは、諸種の年譜および『人間太宰治』によると、武蔵野精神病院のことである。この病院に入

院するまでの経緯については、前述の諸資料および佐藤春夫の「芥川賞」（昭和十一年十一月）に詳しい。また太宰自身の作品では、「東京八景」にその間の事情が述べられている。それらを総合してその概要を述べてみると、次のようになる。

当時の太宰治を内外ともに苦しめていた原因は多様であったが、大きく分類してみると次の三つになろうかと考えられる。その第一は佐藤春夫も指摘しているように富貴、名門の家に生を受けた不幸である。彼はその生家に対して名譽を挽回しなければならなかった。彼が恥も外聞もなく芥川賞にこだわった原因は、ここにあった。また、昭和十年三月十六日、鎌倉の山中でひとり縊死を計った原因も、それだったのである。この年の四月、彼は阿佐ヶ谷の篠原病院に入院して虫垂炎の手術を受けた。すでに手遅れで腹膜炎を併発していて困難な手術になった。同時に胸部の病氣（肺結核）も急に表面に表われてきた。そのため後に世田谷の経堂病院に移ることになるのだが、患部の苦痛を鎮めるために、自ら求めて打つてもらったパビナールが原因で、その中毒に悩まされることになる。これがその第二の原因である。そして第三の原因は、そのパビナール入手のために嵩んだ多大な借金であった。当然彼の生活は荒廃したものとならざるを得なかった。（もっとも山岸氏によると、この生活の荒廃の原因には、当時の社会状況も複雑に絡み合っていた、というのだけでも）そこで、その原因となったパビナール中毒を治すために、昭和十一年

二月、佐藤春夫の紹介で芝の済生会病院に入院する。しかし彼の我儘によって、根治しないまま退院してしまう。さらに同年八月、今度は自分から、パビナール中毒と肺病を癒そうと決心して単身水上温泉に赴き、ここで第三回芥川賞に洩れたことを知って衝撃を受けた。

この頃、初代さんが太宰には内密で、井伏さんとパビナール中毒の処置法について相談をはじめていたのである。とにかく、どこかの病院に入院させて徹底して治療する以外には方法がなからうということになったらしい。武蔵野病院が選ばれたのである。太宰には芝の済生会病院の前例があつて、自由な病院では、また脱出してしまふから駄目だという結論らしかった。そこでいろいろ秘策が練られた結果、いちおう太宰を騙しておいて、太宰の胸部疾患のための静養という名目をつけることにした。（略）その軍師は井伏鱒二氏であり、その実行委員兼誘導員が、初代さんになったようである。（人間太宰治）これは太宰のパビナール中毒による生活の荒廃を、真剣に心配していた周囲の善意によって進められたものであった。しかし、入院先が精神病院であったことで、太宰は強い衝撃を受けた。退院後間もなく執筆された「HUMAN LOSS」において、彼はその間のことを次のように書いている。

（略）Iさん、一生にいちどのたのみだ、はひって呉れ、と手をつかぬばかりにたのんで下さって、ありがた

「Iさんとは、おそらく井伏鱒二氏のことであろう。ここには、一目置いていた氏への気兼ねと、それとは裏腹に彼の内面にどうしようもなく湧き上がる氏への恨みが、微妙に表現されている。」⁽⁵⁾

太宰はまた、次のようにも書く。

(略)「テニスコートがあつて、看護婦さんとあそんで、ゆっくり御静養できますわよ。」と悪婆の囁き。われは、君のそのいたはりの胸を、ありがたく思つてみました。

見よ、あくる日、運動場に出づれば、蒼き鬼、黒い熊、さながら地獄、ここは、かの、どんぞこの、脳病院に非ずや。

人を、いのちも君に一任したひとり人間を、あざむき、脳病院にぶちこみ、しかも完全に十日間、一葉の消息だに無く、一輪の花、一箇の梨の投入をさへ試みない。君は、いつたい、誰の嫁さんなんだい。武士の妻。よしやがれ!

人を信じすぎて、ぶちこまれた。

ここには、極めて主観的な太宰のもの見方と、人間(特に妻)不信の感情とが披瀝されているので、それをそのまま客観的な事実と信ずる訳にはいかない。しかし少なくとも、

当時の彼の内面世界が、ここにはその顔を覗かせていたと考えることができよう。つまり彼の心には、妻にあざむかれたという傷痕が残つたのである。その妻が、彼の入院中にもう一つの過失を犯していた。このことを知つた太宰の衝撃は大きかった。それは、後の「ヴィヨンの妻」や「人間失格」に、神がゐるなら、出て来て下さい! 私は、お正月の末に、お店のお客にけがされました。(ヴィヨンの妻)

神に問ふ。信頼は罪なりや。

ヨシ子が汚されたといふ事よりも、ヨシ子の信頼が汚されたといふ事が、自分にとってそののち永く、生きてをられないほどの苦悩の種になりました。(人間失格) というような形をとつて書き込まれていくほどのものであつた。そればかりではない。パピナール中毒は治つたというものの、この入院体験が彼に遺したものは「HUMAN LOST」というこの作品の題名に象徴されるような、「人間失格」の刻印であつた。そのことを、彼は「俗天使」という作品の中で、次のように述べている。

私は、鳥でもない。けものでもない。さうして、人でもない。けふは、十一月十三日である。四年まへのこの日に、私は或る不吉な病院から出ることを許された。

(略)あのころの事は、これから五、六年経つて、もすこし落ちつけるやうになつたら、たんねんに、ゆっくり

書いてみるつもりである。「人間失格」といふ題にするつもりである。

ところで、このような様々な衝撃を太宰に与えた妻とはどのようなひとであったのだろうか。またその過失とは、どのようなものであったのか。山岸氏は「初代さんのこと」「人間太宰治」の中で、それを次のように書いている。

初代さんにはなにか艶めかしいものがあつたように思う。(略) 眼のぼつちりとした豊頬で小柄の甲斐がいしいひとであつた。(略)

その初代さんが失敗をしたのである。過失をした。太宰が武蔵野病院にはいつていた一か月間の留守のことであつた。太宰の親戚で、美術学校に通つていたKという青年があつたが、初代さんは、この青年と失敗したのである。(略)

その事件のあとで、Kと初代さんとは、膝をそろえて、太宰のまえにかしこまつて、告白したのだそうである。

その結果、彼女は他の人々からも疎外されてしまう。太宰はそのような初代を、かえつて「いいひとだ。それは、おれが知つてゐる。信じてゐる。」(姥捨)と思うようになり、「世の中のひとが、もし、あの人を指弾するなら、おれは、どんなにでもして、あの一とをかははなければならぬ。」(同)と決心する。そして、ここから「姥捨」の世界が展開していくのである。

二二

ところで、この小説にはどうして「姥捨」という題名が付けられたのであろうか。そもそも「姥捨」というのは、次のような伝説に由来するものなのである。

吾心慰めかねつ更科や姨捨山に月を見るとて

此歌は信濃国さらしなのこほりにおぼすて山といふ所のあるなり昔人のめいの子にして養けるが母のおぼとしおひてむづかしくなりければ八月十五夜の月くまなく明かりけるにこの母のおぼをすかしいで、その山にすて、かへりけりたゞひとり山のいただきによもすがら月をみてながめけるうた也さすがにおぼつかなかりければみそかに立かへりて聞ければ此歌をながめてぞなきおりける其後この山をおぼすて山とはいへる也(略)(俊頼口伝集上)

太宰の「姥捨」の主人公は老人ではない上に、ここに引いた伝説の内容とも相違する。ただ、「姥捨」の概要を述べた部分で触れておいたように、覚醒した嘉七が妻のかず枝のほどけた髪を、「山姥」の髪のようにだと見る場面がある。そのかず枝を温泉に残したまま、嘉七ひとりか帰京し、やがて離婚する。それゆえ「姥捨」と名付けられたのであろうか。あるいは彼の「古典龍頭蛇尾」に、「日本の古典文学の伝統が、もつとも香気たかくしみ出てゐるものに、名詞がある。」と書かれ

ているが、その名詞の一つ「姥捨」を題名として選択することによって、この小説に古典的な色どりを添える意図でもあったのであろうか。このことを考えるためには、やはり第二章で述べておいたように、小説の主人公たちをもう一度、太宰治と初代に還元して考えてみる必要がある。

「東京八景」は昭和十六年に発表された作品であるけれども、その中に「朱鱗堂と号して俳句に凝りたりしてゐた。老人である。」という一行がある。これは、『晩年』の諸作を書き始めるころの彼の心境を書いたもので、当時既に、太宰が、「老人」の意識を持っていたことが知られる。さらに、

ああ、この荒涼の心象風景への明確なる認定が言はせた老いの練りごと。(二十世紀旗手・昭和十二年)

釣舟の中に在っては、われのみ蓑を着して船頭ならびに爾余の者とは白らかたち分明の心得わすれぬ八十歳ちかき青年、(同)

かりそめの、人のなきけの身にしてみても、まなこ、うるむも、老いのはじめや。(HUMAN LOST・昭和十二年)

これらの箇所を総合して考えると、彼は当時、自分を老人(精神的な老人)と考えていたことが分かる。

それでは初代についてはどうか。「雌について」の中に「私は、いまの世の中の若い読者たちが、案外に老人であることを知ってゐる。」という一行があった。つまり太宰は、他の若

者たちをも、「老人」と見る意識を持っていたのである。とすれば、初代を「姥」と見る認識が、彼の中に無かつたとは言えない。という訳で、「姥捨」の嘉七とかず枝もまた、年若くとも、十分に老人であり得たのであった。その二人が山へ行つて自殺を計り、失敗して、妻を山に残したまま夫ひとりか帰ってくるというこの小説の虚構は、太宰の意識の中ではやはり「姥捨」だったのである。

ところで、この「姥捨」の話が、日本の口承文芸の世界では、もつと別な形でも語り伝えられていた。それは、山を老人のよみがえり(若がえり)の場として語り伝える昔話であった。その概要を記すと、昔、男の嫁が年老いた母(姨)を嫌い、男を唆して母(姨)を山に捨てさせる。老母(姨)は山中で神の助けによって若がえり、幸福になる。それを妬んだ嫁は、自分をも山に捨てさせるが、神の恵みはなく、たいそう難儀をして死んでしまう。

この昔話は、細部を異にしながら、青森県の三戸郡、八戸市、弘前市などで語られていた。しかも八戸市のそれは、老婆が山から逃げて川端に出て、そこで神の加護を受ける話となつてゐる。『日本昔話大成』(関敬吾編・角川書店)

「姥捨」で二人がよみがえるのは谷川温泉の山である。その上、よみがえつたかず枝は、「宿の娘みたい」に若がえつていたことになつてゐる。

つまりこの小説は「大和物語」からの流れをくむ「姥捨」

というよりも、東北の昔話の趣向にそつた「姥捨」だったのである。

ところで嘉七は、この心中未遂を契機に、かず枝と別れる決心をし、そう決心することによつて、それまで曖昧であつた彼の心がふつ切れる。これは太宰が、苦惱の一年を経た後、「姥捨」を書き、その心の方向を決定したことと重なり合つた。ここに小説家太宰治はよみがえつたのである。先に、この小説が太宰文学において重要な位置を占めている、と述べておいたのは、そのような意味においてであつた。だが、ここによみがえつた太宰治とは、奥野健男が既にその『太宰治論』で言及しているように、人間としての太宰治ではなく、芸術家としてのそれであつたようだ。

たとえば「花燭」において、
自身の行為の覚悟が、いま一ばん急な問題ではないのでせうか。ひとのことより、まずご自分の救済をして下さい。

と書きながら、「わが半生を語る」では、
(略)己を嫌つて、或ひは己を虐げて人を愛するのでは、自殺よりほかはないのが当然だといふことを、かすかに気がついてきました。然しそれはただ理窟です。

(傍点筆者)

と書き、さらに「鷗」においては、

(略)私は、もう、とうから死んでゐるのに、おまへたちは、気がつかないのだ。たましひだけが、どうにか生きて。

私は、いまは人では無い。芸術家といふ、一種奇妙な動物である。(略)

エゴが喪失してしまつてゐるのだ。

と書いているのである。とすれば「姥捨」は、帰死回生の書というよりは、転成(生)の書と言ひ換えた方が適切であるかもしれない。

おわりに

太宰治の「姥捨」は、これまで見てきたように、山(谷川温泉)をよみがえりの場とした小説であつた。そして作者自身にとつては、転生の書としての意味を持つものであつた。

これを日本の文芸の伝統の中に位置づけようとする場合、直接的には太宰の郷里に伝わる親棄山の昔話を継ぎながら、さらに巨視的に見れば、日本文学を貫流している「姥捨」の中に、一つの位置を占める小説であつたと見ることができよう。

(テキストとしては昭和四十二年から四十三年にかけて刊行された、筑摩書房の『太宰治全集』(全十二巻・別巻一冊)を使用しただし、漢字は当用漢字にあらためたものが多い。)

〈註〉

(1) 阿部正路『戦後文学論』(昭和四九年八月十五日・桜楓社刊)の一〇二ページ。

(2) 国学院大学国語国文学会発行の同誌五七ページの拙稿

「現代文学に現われた『姥捨』」

(3) 『太宰治全集11』(昭和四三年一月六日、筑摩書房刊)

(4) 角川文庫(昭和四〇年十一月二〇日・三版発行)二〇四ページ。

(5) もっとも角田旅人の『HUMAN LOST』論(『国文学解釈

と鑑賞』一九七七年12月号)には、『恍惚と不安太宰治

昭和十一年』(奥野健男編・養神書院)を引用して、「井

伏鱒二が佐藤春夫に宛てた経緯報告の手紙に、太宰は「覚

悟して来た。入院したい。」と意志表示して入った」と書か

れている。しかし、太宰自身の心情には、そのような恨み

があつたと考えられる。

(6) 『続々群書類従』第十五歌文部二(明治四〇年七月二五日

・国書刊行会刊)の二二〇ページ。

【補遺】

本稿完成後、相馬正一氏の『太宰治』(昭和五十四年六月十日、津軽書房刊)に接する機会を得た。その中の「パビナル中毒事件」「水上温泉心中行」は、本稿に重なる評伝で、教えられることが多かった。今、それによって、本稿の欠を補っておきたい。

(1) 武蔵野病院への入院

このことは太宰の長兄の依頼を受けた中畑慶吉と北芳四郎の意志が大きく動いており、特に、後者と院長との間には、太宰監禁の打ち合せができていた。また、太宰治自身、入院を承諾していた。従って井伏鱒二は必ずしもその軍師とは言えなかった。

(2) 初代の過失

初代は毎日太宰の見舞いに出かけるが、面会謝絶で会えない。その帰途、自殺未遂で入院していたKを、太宰に替わって見舞った。Kには自殺するほどの内的不均衡があり、初代には太宰を失う不安感と焦躁感があった。このような意識の無重力状態が、二人に犯させた過失であつたらしい。従って二人にはその前にも後にも結婚する意志はなかつた。

(3) Kの告白

昭和十一年十一月二十九日付の太宰治の手紙を受け取ったKは、初代が告白したものと誤解し、翌年三月上京した折に、碧雲荘の便所で太宰と並んで小用を足しながら、二人だけの秘密にしておくはずだった過失を、太宰に告白(Kの話)してしまった。

(4) 「姥捨」の虚構(実際との相違)

①初代が本当に死ぬつもりであつたかどうか疑問であること。

②初代には水上温泉が初めて訪れる土地であつたこと。

③催眠剤をどれだけのんだか疑問であること。(太宰流の計算が働いていた。つまりこれを別離の契機としたのではないかと、ということ。)

④その日のうちに二人は別々に東京に帰っていること。